

〈研究ノート〉

日本語学習者は辞書からどのように言葉を探すのか —中級・中上級日本語学習者7名の辞書使用についての調査事例報告から—

鈴木智美 (東京外国語大学)

【キーワード】「書く」、辞書アプリケーション、スマートフォン、オンライン辞書、電子辞書、
検索プロセス・メモ

1. 本稿の目的

本研究は、日本語学習者が、短文単位のものから長文の作文やレポートまでを含め、日本語で「書く」ことを行う際に、的確な語句・表現を探すために辞書などのツールをどのように使用しているのか、その実態を調査することを目的とするものである。学習者は、それらのツールをいかに効果的に使用していくことができるか、また、その活用を積極的に支援していくために、教育の現場において日本語教師にできることは何かを考えていくための基礎的な研究として位置付けられる。

学習者の効果的な辞書等の使用を支援していくためには、まず学習者の日本語を「書く」過程における辞書等のツールの使用状況について観察し、必要に応じて聞き取り調査などを行い、その実態を記録・確認していくことが必要ではないかと考えられる。スマートフォンなどの機器や種々のアプリケーションツールの普及が進み、オンラインで利用できる各種の辞書や翻訳などのサイトも広まってきている中、日本語で何かを「書く」ことを行う際、それらのツールを活用することは、例えば日本に留学している学習者等においては、非常に身近で、かつ日常的な行動となっているのではないかと考えられる。学習者自身でもさほど意識することなく、これらの活動を行っていることもあるかもしれない。使用しているツールをはじめ、その使用方法、使用に関する意識化の度合いにも、おそらく個人差や多様性が見られるだろう。また、周囲の日本語教師においても、実際に学習者がどのようにこれらのツールを使用して「書く」ことを行っているのかは、例えば教育現場などで断片的に目にすることはあったとしても、意識的にその過程を観察する機会等を持たなければ、気づかない面も含まれている可能性が大きい。

本稿では、日本の大学に留学している中級・中上級レベルの日本語学習者7名の協力を得て、日本語で短文を完成する課題を行ってもらい、適切な表現を見つけるために辞書などのツールを実際にどのように使うかを確認する調査を行った。ここでは、その結果について報告し、学習者の使用するツールとその使用方法について考察を行う。また、学習者がどのように辞書等を使用しているのか、その実態を解明するための調査方法そのものについて検討を加えることも目的の一つとする。

2. 研究の背景

日本語教育においては、以前より日本語学習に役立つ辞書の充実については、その必要性が指摘されてきた。昨今では狭い意味での「辞書」に限らず、日本語の大規模コーパスを活用す

ることで、日本語学習を支援する種々のツールの作成も行われている。例えば、日本語学習者にとって「? 人気が増える (→高まる)」? 目標を完成する (→達成する)」など、日本語のいわゆるコロケーション (慣習的に定着した語と語の結びつき) は、的確な表現を産出するのが難しい項目の一つである¹。近年では、大規模コーパスを利用して、このような日本語の共起表現をオンライン上で検索することのできるシステム構築なども行われ、その有効性についても検証が行われている。例えば、日本語作文支援システム「なつめ」は、このような日本語のコロケーションが検索できるツールで、検索結果として提示された各表現については、どのようなジャンルでどれくらい使われているのかも見る事ができる²。また、「NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)」は、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を対象としたコーパス検索システムで、「名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的な振る舞いを網羅的に表示できる」とされるオンライン検索ツールである³。また、日本語学習者の作文・文章表現に焦点を当てた研究もその歴史は長く、様々な観点からの研究が継続的に行われている。一方、学習者の作文と、辞書等のツールの双方を結びつけるものとして、日本語学習者が「書く」活動を行う際に、辞書等のツールをふだんどのように使うのか、その「使用」のありさまを詳細に見るといふ観点からの研究はさほど多くは見られない⁴。その使用過程は複雑で、実態の観察も決して容易ではないことも一因となっているかもしれない。

一方で、学習者を取り巻く状況はここ数年の間に急速に変化している。鈴木 (2012) が2011年1~2月に日本国内の大学における留学生 (117名) を対象に「辞書」の使用について行った調査⁵では、書籍タイプの辞書は既に約6割の学習者がほとんど使わないとする一方、電子辞書は全体の約7割がよく使うという回答であり、電子辞書の使用が顕著であったことが示されている。また、携帯電話やパーソナルコンピュータの辞書アプリケーションについては、よく使うと回答した者は全体の約3割である⁶。一方、ウェブ上のオンライン辞書

1 姫野監修 (2004) は、このような学習者の困難点に早くから着目し、動詞、形容動詞を中心に典型的なコロケーションと多くの例文を示した画期的な辞書の一つであると言える。姫野監修 (2012) は、さらに形容詞を加えるなど、大幅な増補改訂を行ったものとなっている。

2 「なつめ」(Natsume) (<https://hinoki-project.org/natsume/>) が基盤としている大規模コーパスは、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)のほか、独自に収集した理科系学会の科学技術論文、およびウィキペディアのデータであるとされる。「なつめ」については、Hodošček 他 (2011) で、上級日本語学習者のアカデミックなレポート作成において、共起表現の産出に有効性が確認されたとしている。

3 「NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)」(<http://nlb.ninjal.ac.jp>) の「NINJAL-LWP」とは「NINJAL-Lago Word Profiler」のことで、国立国語研究所とLago言語研究所とが、レキシカルプロファイリングという手法を用いて共同開発したシステムという意味である。同システムを利用したツールとしては、日本語のウェブサイトから収集・構築した約11億語から成る「筑波ウェブコーパス」(Tsukuba Web Corpus: TWC) を対象とした「NINJAL-LWP for TWC (NLT)」(<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info>) も開発されている。

4 鈴木 (2010, 2012, 2013, 2014)、鈴木・高野 (2015) ではそのような観点からの観察を行っている。

5 2011年1~2月に、東京外国語大学で開講されている日本語プログラム受講生を対象に辞書の使用状況のアンケート調査を行い、初級から上級までを含め、全42の国・地域の学習者117名より回答を得たとしている。

6 この調査では、旧来型のいわゆる「携帯電話」と、この頃を境に普及が急速に本格化する「スマートフォン」とは区別していない。したがって、ここで「携帯電話のアプリケーション」としているのは、いわゆる「iPhone」などのスマートフォン上で使用される辞書アプリケーションのことを意味している。それらの辞書アプリケーションの使用者が3割であったというのは、2015年現在の状況と比較すると少ないという印象であるが、鈴木 (2012:17) でも、調査時 (2011年1~2月) には少数派と見られたスマートフォンが、約10か月後の2011年10月にはかなりの使用者が見られるようになったと、その急速な変化をとらえている。

は「よく使う」から「時々使う」までを含めると、全体の約6割は何らかの形でこれを使用している傾向が見られ、オンラインでの辞書の使用は、学習者に行き渡りつつある辞書使用の形態として注目すべき1つの傾向を示しているのではないかと指摘している。

実際、上記の調査時期(2011年)前後より、いわゆる「スマートフォン」が本格的に普及し始め、2015年現在では、スマートフォンやタブレット向けに多くの辞書アプリケーションが開発・提供されるようになってきている⁷。オンラインで使用できる辞書等のサイトの種類も多い⁸。鈴木・高野(2015)が2014年10月に中上級文章表現のクラスで学習者29名に確認したところでは⁹、ふだん使用する辞書のタイプは電子辞書14名に対し、スマートフォンやPCの辞書アプリケーション25名、オンライン辞書20名(複数回答可)と、鈴木(2012)で観察された回答結果とは逆転した傾向が見られ、電子辞書ももちろん使用されてはいるが、それを上回って、スマートフォンのアプリケーションやオンラインで検索できる辞書ツールがよく使われるようになってきている傾向がうかがえる。

このような状況の中、学習者はそれらのツールの使用については、特に教育カリキュラムにおいてガイダンスや支援等を受けることはないようで¹⁰、学習者同士で情報交換をしたり、各自で選択の上、工夫しながら使用しているようすである。しかし、このことは、一概にそれが問題であるということの意味するものではない。学習に役立つアプリケーションやウェブサイトがあれば互いに情報交換し、各種の新しいツールを自身の学習活動に取り入れ、活用していくのは、それらの実際の実用者である学習者自身である。実際に使用されることで、その評価はいわゆる口コミやインターネット上での評価という形で伝えられていく¹¹。そのようなフィードバックが開発者にも届くことによってツールは改良され、あるいは淘汰され、定評のあるツールが存続することにもつながっていく。その意味では、日本語学習における辞書等のツールを考える時、その実用者である学習者自身がその中心に主導的に位置する状況は、自然かつ当然な姿ではないかと思われる。一方、学習者が実際にどのようにツールを用いているのか、その学習行動の詳細は、ツール等の開発者だけでなく、学習者の日本語学習を支援する立場にある現場の日本語教師にとっても、把握し、学ぶべき価値のある情報ではないかと思われる。

以上のような状況の中、本研究では、学習者が日本語で「書く」活動を行う際に、実際に辞書等のツールを具体的にどのように使用しているのか、日本語教師の立場から、継続的にその詳細を確認し、記録する調査を行っていくこととしたいと考えている。

7 学習者から使用例として挙げられたアプリケーションには、例えば「imiwa?」(iPhone/iPad対応の英日・日英辞書)、「JED-Japanese Dictionary」(Android端末対応の英日・日英辞書)などがある。

8 既存の各種辞書(国語辞典、英和・和英辞典、中日・日中辞典など)がオンライン上で検索できるサイトや、多言語対応の翻訳サイト、そのほか個々に開発された辞書サイトがある。

9 辞書使用のスキルアップを目指したワークショップを実施するにあたり、参加学習者にふだん日本語で文章を書く時に使用する辞書のタイプ・種類を確認している。

10 電子辞書を購入する際に母国の教師から薦められたというような例はある。

11 各種アプリケーションについては、使用者のレビューやダウンロード件数をもとに、定番のものや人気のものをランキング形式で紹介するサイトが複数ある。動画共有サイトでも、アプリケーションのダウンロードのしかたや具体的な設定のヒントなどをユーザーが紹介したり、そのアプリケーションの特長を紹介したりする動画が投稿されている。

3. 調査の概要

日本国内の大学に留学している学習者の協力を得て行われた同様の調査では、鈴木(2014)、および鈴木・高野(2015)(前半の辞書使用の調査部分)がある。ここでは、調査参加者に日本語で600字程度の作文を書いてもらい、その際の辞書使用状況を録画および事後インタビューにより確認する方法をとっている。本稿では、それとは異なり、鈴木・高野(2015)(後半の辞書使用のスキルアップを目指したワークショップ実践報告部分)において、タスクを行う際に辞書使用の「プロセス・メモ」を用いている点に着目し、その方法を調査に応用することとした。

鈴木・高野(2015)で報告されているワークショップでは、辞書を使って適切な語句を見つけるタスクを行う際、学習者には「プロセス・メモ」を記入しながら、自身の辞書を使う過程、およびある語・表現を選んだ根拠について意識化を促すという方法をとっている。プロセス・メモには、最初に調べた語・表現を記入し、使った辞書の種類や、どのような説明や例があったかを簡単に記すとされている。別の辞書や別の語句をさらに調べた場合には、矢印で検索の順序を示して同様にメモし、最終的に選んだ語・表現に印をつける(鈴木・高野(2015:146))。今回の調査では、調査参加者には、長文の作文を書いてもらうのではなく、短文レベルで空欄箇所にあてはまる適切な日本語表現を考える課題を行ってもらい、その際にどのように辞書等を使ったかについて、「検索プロセス・メモ」を同時に書いてもらうことにした。課題終了後に、そのプロセス・メモを見ながら事後インタビューを行い、詳細を確認する方法をとった。

調査の概要は以下の通りである。なお、調査にあたっては、調査参加者それぞれにふだん使用している辞書(電子辞書、スマートフォン、タブレットなど)を持参してもらった。

(1) 調査概要

- a. 調査時期：2015年7月
- b. 調査参加者：中級・中上級レベルの日本語学習者7名¹²
- c. 調査方法：
 - ①調査研究の目的および方法を説明¹³
 - ②同意書およびフェイスシート記入
 - ③辞書を使用した短文課題を実施(検索プロセス・メモに記入)
 - ④事後インタビュー

調査は一人ずつ時間をとって個別に行い、インタビューも含め、一人あたりの調査時間は約50分～1時間20分であった。「検索プロセス・メモ」は、鈴木・高野(2015)も参考にして、

12 調査への参加協力者は、いずれも東京外国語大学で日本語を学ぶ留学生である。1名は日本語能力試験N2レベルに既に合格し、上級レベルの学習に入っているが、他6名は中級・中上級レベルのコースで学習している。

13 調査にあたっては、調査の目的が日本語学習者の辞書使用の実際を調べることであるということ、調査をもとに、日本語学習者の効果的な辞書使用について考えていきたいということを説明している。調査開始前には調査参加者の夏休みの過ごし方について尋ねるなど、なるべく緊張を和らげてもらえるように心がけた。また、調査参加者には、調査終了後に1点200～350円ほどの文房具類をいくつか選んでもらい、お礼として渡した。

最初に調べた語・表現、使用した辞書、記載されていた語句や参考にした例文などを記入する欄を設けて作成した。以下の図1に今回使用した検索プロセス・メモのフォーマット、図2に調査参加者に書き方を説明した際のサンプルを示す。

【プロセス・メモ】		国	お名前
	最初に調べた語	使った辞書	メモ(調べた語・訳・見た例文 など)
①			

図1 「検索プロセス・メモ」のフォーマット

【プロセス・メモ】(例)			
<ul style="list-style-type: none"> ●辞書で調べた過程(process)がわかるように、メモをしてください。 ●日本語でも、ほかの言語(例:英語)でも、参考にしたものは何でもいいます。 			
	最初に調べた語	使った辞書	メモ(調べた語・訳・見た例文 など)
例1)	影響(えいきょう)	電子辞書 和英 電子辞書 和英	<p>・調べた順番がわかるように、→で、その流れを示してください</p> <p>・最後に選んだ表現を○で囲んでください。</p> <p>「～する」 influence 例文:「よい影響を及ぼす[与える]」 「...にマイナスのえいきょうを与える」 →「与える」 have an effect on sth (sb) 例文:「その写真は人々に深い感動を与えた」「いい印象を与えた」 → 「影響を与える」</p>

図2 検索プロセス・メモ(記入例)

また、調査への参加協力者(以下、「参加者」)の母語や、ふだん使用している辞書の種類等については、以下の表1にまとめて示す。なお、ここで「ふだん使用している辞書」として書籍タイプの辞書や文法辞典等も挙がっているが、調査においてこれらのすべての辞書が使用されたということではない。実際に使用された辞書については、個々にプロセス・メモに記入してもらっており、第4節における調査結果の解説において個々に述べる。

表1 調査への参加協力者

	国・地域 母語	性別	日本語 学習歴	来日 経験	日本語 能力 試験	ふだん使用する辞書
1	東欧 東欧語	女	3年	初めて	—	電子辞書(CASIO EX-word:英和・和英) スマートフォン:辞書アプリ(imiwa?:英日・日英) オンライン辞書(jisho.org:英日・日英)
2	中東 アラビア語	女	3年	初めて	—	スマートフォン:辞書アプリ(imiwa?:英日・日英)
3	北欧 北欧語	女	4年	2回目	—	スマートフォン:辞書アプリ(imiwa?:英日・日英)、 オンライン辞書(POPjisy.com(ポップアップ多言語辞書) jisho.org:英日・日英)
4	中央アジア ロシア語	女	4年	初めて	N2	電子辞書(CASIO EX-word:露和・和露、国語辞典) スマートフォン:辞書アプリ (EJLookup(銀影):露日・日露、英日・日英)
5	中南米 スペイン語	男	2年	初めて	N3	タブレット:辞書アプリ(青葉辞書:日英、Kanji Draw:漢字 JED-Japanese Dictionary:英日・日英) Mac:アプリケーション(Dictionary:英和・和英、国語辞典) オンライン辞書(jisho.org:英日・日英)
6	中南米 スペイン語	男	2年	2回目	—	スマートフォン:辞書アプリ (JED-Japanese Dictionary:英日・日英、 スーパー大辞林:国語辞典) オンライン辞書(アルク英辞郎 on the WEB:英日・日英 goo辞書:国語辞典、英和・和英) 書籍(岩波国語辞典、日本語文法辞典(The Japan Times))
7	中南米 スペイン語	女	3年	初めて	—	スマートフォン:辞書アプリ(imiwa?:英日・日英)

参加者に行ってもらおう短文課題は全8問用意した。いずれも文中の空欄箇所に、適切な日本語の表現を記入してもらおうタイプの問いである。鈴木・高野(2015:150)でも述べられているように、学習者が辞書を使いながら日本語を「書く」という、実際の状況からなるべくかけ離れないよう、与えられた日本語表現の不適當な箇所を修正するというタイプの課題ではなく、適切な語句を自ら探すというタイプの問いを設定することにした¹⁴。

問いの文には英訳等は付さず、日本語の文のみで状況が伝わるよう考えながら、コロケーションを中心に空欄箇所を設定し、必要に応じて状況についての補足説明を()内にごく簡潔に日本語で記した。また、写真を見て状況を日本語で説明するタイプの問いも含めた。なるべく辞書を使いながら表現を探すような状況が生まれるよう、想定した回答は旧日本語能力試験出題基準における1級レベル語彙が中心となっている。短文課題8問は、以下の表2の通りである。

14 今回の調査では、短文課題には多少の修正を加えつつ行っていた。問いのタイプとして、鈴木・高野(2015)のワークショップで基礎編のタスクとして設定されていたものと同様に、「下線を付した日本語の(不適當な)表現をより適切な表現に修正する」というタイプの問いも初めに2問準備していた。しかし、実際に日本語を「書く」状況になるべく近づけるため、3人めの調査参加者からは、このタイプの問いを削除し、全問を空欄箇所に適切な語句を記入するというタイプにそろえた。

表2 短文課題一覧

(1) 「本当の友だち」とは何だろうか。私は、喜びや楽しいことだけではなく、嫌なことやつらいことも、 _____ことができる人だと思う。
(2) 私たちの国は、今後、日本との関係をいつそう_____いきたいと思っている。 (=もっと関係したい)
(3) 留学中に、日本語がずいぶん上手になった。日本人の友だちもできたり、日本の社会についても、いろいろ 学ぶことができた。留学の目的は、十分に_____と思う。
(4) 会議は4時間続いたが、内容については、まったく_____がなかった。 (=何も進まなかった)
(5) 計画が失敗した時、友人は、「計画には問題はない。失敗したのは、君(=あなた)のやり方が悪い からだ」と、私に責任を_____。
(6) 宿題の量が多すぎると、1つ1つにあまり注意を払わず(=注意しないで)、_____に、 やってしまうことになるかもしれない。(=よく考えないで、これでいいと)
(7) 【写真を見て、湖のようすについて説明してください】 湖は、美しかった。鏡のような水面に、_____。
(8) 【写真を見て、車内のようすについて説明してください】 隣の人との間を少し_____たら、あと二人すわれそうだ。

(※実際には、問題文中の漢字には、適宜ルビを付している。)

4. 調査結果

以下、表3～表10に、短文課題(1)～(8)の順に調査参加者の回答を示し、解説を加えていく。(各表における参加者1～7の番号は、表1「調査への参加協力者」の番号と対応する。)また、これらの調査結果から見えてきた、日本語学習者の辞書検索プロセスとして特記すべき点については、第5節であらためてまとめる。

以下の各表においては、各参加者の回答を示した欄のうち、上段は最終的に選んだ語句、下段「←」の次に記したのが、辞書で最初に調べた語句である。1回目の検索がうまくいかず、次に別の語句を選び、別方向から検索をし直した場合には、最初に調べた語句を①とし、順に②、③として次に行われた検索対象語句を記した。ただし、最初に検索した語句についてその例文中の語句をさらに調べるなど、いわば最初の検索を補うための「追加検索・確認」などを行った場合は、「別の検索」とは考えず、この表中では②や③などとしては示していない。また、最終的に選んだ語句について、当該の短文課題の回答としては文法的に不適当だと考えられる場合には「*」、意味的に不自然だと考えられる場合には「?」を、当該語句の末尾に付した。

なお、今回の調査では、短文課題について、調査参加者の日本語レベルや答えやすさなど

を見ながら、多少の修正を加えながら行っていった¹⁵。そのため、当該の問題を行わなかった参加者の場合には、その問題の欄には斜線が入れている¹⁶。また、「辞書使用せず」となっているのは、その短文課題については参加者が特に辞書を使用しなかったというもので、「回答なし」は、辞書を検索し、プロセス・メモも記入したものの、最終的に語句が特定できなかったというものである。

短文課題の空欄箇所に入ると想定される語句は、以下、表中の個々の問題の下に〈想定される回答〉として例を示した。[]内の数字は、旧日本語能力試験における当該の表現の級レベルを参考として示したものである。4～1級までのリストにないものは「級外」と記している。

4.1 短文課題(1)の回答結果

表3 短文課題(1)の回答

(1)「本当の友だち」とは何だろうか。私は、喜びや楽しいことだけではなく、嫌なことやつらいことも、 _____ことができる人だと思う。 〈想定される回答〉: 共に [2] する ¹⁷ 、分かち合う [級外] など						
参加者1	参加者2	参加者3	参加者4	参加者5	参加者6	参加者7
何でも一緒に耐える	扱う?	話し合う	分け合う?	両方の?	打ち明ける	共にする
← endure	← handle	(辞書使用せず)	← ロシア語で “to share”	← both	← confide	(辞書使用せず)

(※上段は最終的に選んだ語句、下段「←」の次に示す語句は最初に調べた語句、以下同様)

問(1)は、鈴木・高野(2015)のワークショップにて、応用編のタスクとして設定された課題を参考としたものである。参加者3と参加者7は辞書を使用せずに回答している。

参加者1、2、6は、それぞれに文脈の意味を考え、まず英語の語句から検索している。参加者1は、電子辞書の英和辞典で「endure」を引いた後、その訳語「耐える」を同じく和英辞典で引き直し、「endure/bear/withstand」という英訳を確認している。例文「運命の試練に耐える／辛い仕事に耐える」を見て、この語でよいと判断したとのことである。参加者2はスマートフォンの辞書アプリケーション(imiwa?) (iPhone/iPad対応のアプリケーション)で「handle」を検索したところ、様々な例が出てきたという。「この問題は私が扱います」という例文があったことから、問題に対処する場合に「扱う」という語が使えるのではないかと考えたということである。参加者6は、オンライン辞書(英辞郎on the WEB)

15 修正段階で削除した短文課題には「そのCD全集(=complete works)には、モーツァルト(=Mozart)のピアノソナタが、第1番から第18番まで、すべて_____されている(=入っている)。(想定される回答:収録[級外]など)、「日本社会は、第二次世界大戦後、急速な発展を_____ (=発展した、発展を実現した)。しかし、1990年代からは不況の時代に入り、その後、社会は_____が続いている(=発展がなく、止まったままだ)。(想定される回答:遂げる[1級]、停滞[1級]など)がある。

16 参加者1が一番初めに実施した調査参加者で、その後問題に修正が加わったため、参加者1に該当しない欄が多くなっている。また、調査後半に問題(8)を追加し、写真のようすを文で説明するというタイプの問いを2問としたため、半数ほどの参加者の回答では(8)が該当せず、斜線が入っている。

17 「共(に)」は旧日本語能力試験出題基準では2級レベルの語であるが、「分かち合う」という意味での連語「共にする」については、級外相当であるとも考えられる。

で「confide」を検索している。「(人)に秘密を打ち明ける」という例文を見て、これを選んだとのことである。

この問いの空欄部分には動詞を入れることを想定していたが、参加者5は、空欄部分に後続する「こと」を、補足節を形成する形式名詞とはとらえなかったようである。文全体を見れば、「楽しいこと／つらいことを“する”」だけでは十分な意味をなさないのだが、動詞を補って表現する必要があることには気づかなかったようである。

参加者4は、工夫して検索しつつも、複数の辞書を堂々巡りしてしまった感がある。ロシア語には「share」にあたる語が2つあるとのことで、まず、双方の語をスマートフォンの辞書アプリケーション(EJLookup:露日・日露辞書)で調べている。一方は「分け合う」、もう一方は「共にする・合歓する」という訳が表示されたという。「分け合う」を同アプリケーションの日英辞書で確認すると「share」であることが確認できた。念を入れて「share」を同じく英日辞書で確認したところ、今度は「分かち合う」という未知の語が出てきた。電子辞書の国語辞典(明鏡国語辞典)で確認したところ、「分かち合う」には「分け合う。互いに分担する」という語義説明があり、このことから、結局、最初にロシア語の1つの対訳として表示された「分け合う」を選ぶことにしたということであった。問(1)の文脈ではより適切だと思われる「共にする」「分かち合う」という語も検索によって出てきているが、「共にする」については意味・例文は確認しておらず、「分かち合う」についても「分け合う」と比較判断する情報は得られなかったようである。

4.2 短文課題(2)の回答結果

表4 短文課題(2)の回答

(2) 私たちの国は、今後、日本との関係をいっそう_____いきたいと思っている。 (=もっと関係したい) <想定される回答>: 発展させる [3]、深める [1] など						
参加者 1	参加者 2	参加者 3	参加者 4	参加者 5	参加者 6	参加者 7
	深めて	強めて	深めて	強化に*	深めて	深まって*
	←① strengthen ② deepen	←① increase ② strengthen	← 関係を 深める	← ①仲良く ②関係	(辞書使用せず)	(辞書使用せず)

参加者6と7は辞書を使用していない。ただし、参加者7は、動詞の自他(「深まる／深める」)を勘違いしてしまったようである。

参加者2と3は、どちらも英語の語句から検索を行っている。参加者2は、スマートフォンの辞書アプリケーションで英語「strengthen」を検索したところ、「強める」という訳語が表示された。しかし、「西側諸国はドルを強めるために協議し合わなければならない」など、提示された例文がこの問いの文脈とは合わないように思ったという。次に「深める」という言葉を思い出し、「deepen」を検索して意味を確かめた。例文に「われわれは親睦を深めた」があり、これに決定したという。参加者3は、初めに「強くする」という意味の言葉を使いたいと思ったが、適当な語が思い出せなかったため、スマートフォンの辞書アプリケーションで「increase」を調べたという。「増やす」が出てきたが、「増やす」は「量」に使う言葉であり、「関係」について用いるのは的確ではないと考え、「strengthen」で検索し

直した。「強める」が出てきたので、それに決定したということである。

参加者5は、タブレットの辞書アプリケーション(青葉辞書:日英)で既知の語句である「仲良く」を調べてみたが、英訳を見た限りあまり納得できなかったとのことである。次に、文中のヲ格補語の名詞「関係」から検索し直し、「関係強化」(strengthening of relationships)という複合語を見つけ、その後項部分の「強化」を取り出し、「強化に」と回答している。「関係を強化する」という表現そのものについての確認は特にしていない。文法的には、空欄部分に後続する「いく」が、動作の継続を表す補助動詞であることに気づかなかったのか、「食事に行く」等と同様、移動とその目的を表す表現形式をとって「強化にいく」という形で回答している。

参加者4は、ウェブ検索(Google検索)で「関係を深める」と入力して検索したところ、「Weblio類語辞典」という辞書サイトが表示されたという。「関係を深める」の類義表現として「関係を強める」「結びつきを強化する」などが載っており、この表現でよいと考えたということである。コロケーションとして定着している表現であれば、このように直接ウェブ検索を行っても、該当する表現が表示されてくる可能性は高い。

4.3 短文課題(3)の回答結果

表5 短文課題(3)の回答

(3) 留学中に、日本語がずいぶん上手になった。日本人の友だちもできたり、日本の社会についても、いろいろ学ぶことができた。留学の目的は、十分に_____と思う。 <想定される回答>: 達成する [1]、果たす [1] など						
参加者1	参加者2	参加者3	参加者4	参加者5	参加者6	参加者7
	成し遂げた	達成した	実現できた	達成した	かなえた	成し遂げた
	← accomplish	← achieve	← 目的	← 達成	← ① fulfil ② 目的を	← achieve

参加者2、3、7は英語の語句から検索を始めている。参加者2と参加者7は、いずれもスマートフォンのアプリケーション「imiwa?」を使用しているが、参加者2は「accomplish」から「成し遂げる」を、参加者7は「achieve」の例文中に「成し遂げる」を見つけ、それぞれに「あなたは目的を成し遂げましたか」という同一の例文を確認している。参加者3は、「達成する」は既知の語であったが、確認のために「achieve」を見たとのことである。

参加者6は、オンライン辞書(英辞郎 on the WEB)で、「fulfil」を検索している。あまりいい結果が得られなかったとのこと、次に、問いの文中で当該の動詞部分のヲ格補語となっている「目的」に助詞「を」を加え「目的を」として検索している。「目的をかなえる」(meet an objective)という表現が出てきたので、「かなえる」を選んだとしている。このオンライン辞書では、例えば「目的」と入力してみると、「目的がある」「目的に合う」「目的に向かって」「目的のある人生」「目的を達成できなかった」「目的を持った行動」「目的を果たす」「目的を達成する」「～の目的で用いられる」「目的意識」等々、「目的」を含む2,000例以上の項目例が表示されることがわかる。助詞を含め「目的を」として検索すると500件ほどに絞られる。検索結果は、検索語句の直後の文字の五十音順に表示されるため、「目的をかなえる」が「目的を実現する」や「目的を成し遂げる」「目的を果たす」よりも前に、冒頭に

表示されてくる。それぞれに英訳は付されているものの、それらの表現の相互の違いについて、それ以上の情報はない。また、検索結果が膨大になると、それらの例を一つ一つ最後まで見ていくのは難しいかもしれない。

参加者4は、まず、電子辞書の国語辞典(明鏡国語辞典)で「目的」を引き、その語義説明「実現させようとしてめざす事柄」をヒントに「実現」という語を選び出し、スマートフォン辞書アプリケーションで母語のロシア語訳を調べている。「計画を実現する/目的を果たす」という意味のロシア語の説明が出てきたので、この「実現する」を使うことにしたということである。国語辞典の語義説明で用いられる表現が、必ずしも当該の語句と「補語-動詞」などの共起関係に立つものであるとも限らない¹⁸ため、注意は必要だが、国語辞典の説明からヒントを得るとするのは、辞書検索の一つの工夫であると思われる。

4.4 短文課題(4)の回答結果

表6 短文課題(4)の回答

(4) 会議は4時間続いたが、内容については、まったく_____がなかった。 (=何も進まなかった)						
<想定される回答>: 進展 [1] など						
参加者1	参加者2	参加者3	参加者4	参加者5	参加者6	参加者7
		決断?	進捗?	進歩?	進展	進展
		← ① decide ② develop ③ 進む	← ロシア語で 「進歩」	← 進歩	← new development	← 進展

参加者5と7は、それぞれ日本語の「進歩」「進展」から検索を行っている。参加者7は「交渉はほとんど進展しなかった」という例文を確認している。一方、参加者5は、「文明の進歩がとても速い」「彼は英語がほとんど進歩しなかった」という例文から、本当に「進歩」でよいかどうかは確信が持てなかったということであった。

参加者4は、ロシア語で「進歩」にあたる語を調べたところ、「進歩/発達/進捗」という訳語が見つかり、「進捗」に議論に関係のある例文があったことから、この語の意味を国語辞典で確認したという。さらにウェブ検索で用例を見ると、「進捗内容」という複合語が表示されたことから、問いの文脈に適合しているのではないかと考えたとのことである。実際に「進捗」をウェブ検索したところ、「進捗内容」は見られなかったが、「進捗状況」という表現は多く表示されることがわかる。文法的に考えれば「進捗状況」も「進捗内容」も、前項動詞(「進捗する」)と後項名詞(「状況」「内容」)とは、いわゆる内容節の関係で結びつくことになり、この問いの文中における「内容」が、会議の実質的な内容を表しているのとは異なっている。このように当該の表現を含んだ複合語を手がかりとする場合も、そこから必ずしも補語と動詞という共起関係が正しく予測できるとは限らないため注意は必要かもしれない。

参加者6は、オンライン辞書で「new development」を検索し、「(事態の)新しい進展」

18 例えば、この場合の「実現させる」対象は、「目的」ではなく、語義説明の中にもあるように「(ある)事柄」とも考えられる。

という訳を見て「進展」にしたということである。

参加者3は「何も決まらなかった」ということであろうと考え、「decide」からスマートフォンの辞書アプリケーションの検索を始めている。しかし、あまりいい結果が得られなかったため、「develop」で検索し直している。これもあまりよい結果が得られず、さらに日本語の「進む」から検索し直している。「進む」の類義語として表示された「捗る」を使いたいが、使い方に自信がなく、結局、既知の「決断」という語を使うことにしたということである。

4.5 短文課題(5)の回答結果

表7 短文課題(5)の回答

(5) 計画が失敗した時、友人は、「計画には問題はない。失敗したのは、君 (= あなた) のやり方が悪いからだ」と、私に責任を_____。 <想定される回答>：押し付ける [級外]、なすりつける [級外] など						
参加者 1	参加者 2	参加者 3	参加者 4	参加者 5	参加者 6	参加者 7
	なすりつけた	移した?	転嫁した	移られた*	なすりつけた	転嫁した
	← 責任	← ① leave ② make responsible ③うつす	← 責任を移す	← ① to pass ②責任を ③うつす	← 責任を	← blame

参加者2はスマートフォンの辞書アプリケーションで「責任」を検索したところ、例文に「彼らは私に責任をなすりつけた」があったため、これを選んだとしている。参加者7は「blame」から検索を始め、「咎める／転嫁」という訳が出てきたが、「ジョンは責任を他人に転嫁する」という例文から「転嫁する」を選んだということである。

参加者6は、オンライン辞書で、助詞「を」も含め「責任を」と入力し検索している。実際にこのオンライン辞書を検索してみると「責任をとる」「責任をなすりつける」「責任を免れる」「責任を全うする」など約1,000件の例が英訳とともに表示されることがわかる。参加者6は、その中から「なすりつける」という動詞を選び（「責任をとる」という例に続き「責任をなすりつける」が2番目に表示される）再度検索したところ、その語義説明（英訳）に「pin（罪・責任を）」とあったので、これを選んだとしている。

参加者4は、ロシア語ではこのような時、日本語に直訳すると「責任を移す」という表現をするため、この日本語をそのままウェブ検索してみたということである。すると、「責任転嫁」という表現が多く表示されたという。「転嫁」のロシア語の意味を辞書アプリケーションで確認したところ、初めに思い浮かべたロシア語表現と同じであるとわかったため、これを選んだということである。

参加者3は、「風邪をうつす」という表現を知っていたので、「うつす」が使えないかとまず初めに思ったということである。スマートフォンの辞書アプリケーションで「leave」を見たが、あまり適当な例は見あたらなかった。「make responsible」とも入れてみたが、何も出て来なかった。初めの考えに戻って日本語の「うつす」を引き、英語の意味説明だけを見て、たぶんよいだろうと考えたということである。未知の語であれば例文を見るが、「うつす」自体は知っている語だったため、例文は見なかったということである。

参加者5は、タブレットの辞書アプリケーションで「to pass」と検索してみたが、様々な表現が出てきてわからなかったため、次に「責任を」で検索してみたという。しかし、また多くの表現が出てきて決められなかったため、「うつる」という語を思い出し、これを検索したという。「責任をうつる」という例はなかったものの、「うつる」の英語の説明を見て、意味的にこれでよいかと思ったということである。

このように、参加者3、5については、いずれも確信を得ないまま「うつす」「うつる」を選ぶことにしたように思われる。

4.6 短文課題(6)の回答結果

表8 短文課題(6)の回答

(6) 宿題の量が多すぎると、1つ1つにあまり注意を払わず (= 注意しないで)、_____に、やってしまうことになるかもしれない。 (= よく考えないで、これでいいと) <想定される回答>: 適当に [3]、いい加減に [1] など						
参加者1	参加者2	参加者3	参加者4	参加者5	参加者6	参加者7
単調?	むやみ?	中途半端	みだり?	あたふた*	中途半端	思慮無し
← monotonous	← ① carelessly ② recklessly	(辞書使用せず)	← ロシア語で「急いで」	← in a hurry	(辞書使用せず)	← prudence

問(6)については、問題文の空欄箇所の下()内の「よく考えないで、これでいい」という補足説明は、修正の上、参加者2~7に示されたものである。参加者1は、提示された問いの文脈を自分なりに解釈した上で「単調に」と回答しており、したがって、参加者1の回答は、参加者2~7とは異なる文脈を想定したものとなっている。

参加者1は、電子辞書の英和辞典で「monotonous」を検索し、「変化のない/単調な/退屈な」という訳を見つけている。この中から「単調」を選び、和英辞典で調べ直すと、「単調に(monotonously)」という副詞形が確認できたので、これを選んだとのことである。ただし、辞書の例文では、必ずしも語と語の共起関係の情報は十分でないため、「単調に(宿題・課題・仕事などを)やる」という表現が的確かどうかまでは確認できなかったと思われる。実際に手元の電子辞書搭載の和英辞典3種を見ても、「単調に繰り返す」「単調に歌う」「毎日が単調に過ぎて行く」という例文は見られるが、「(宿題などを)単調にやる」が適切かどうかは確認できない。

参加者3と6は、いずれも辞書は使用せず、どちらも「中途半端」という既知の語句を選んでいる。参加者7は、英語「prudence」を検索し、「彼の思慮の無さには驚いた」という例文から、自分で語形を考え「思慮無しに」という表現を使うことにしている。

参加者5は「in a hurry」から「彼女はあたふたとここを去った」という例文を見つけたが、「あたふたと」が「あたふたに」という形で使えるのかどうかという点には特に注意を払わず、「あたふた」を使用することにしている。一方、参加者2は、スマートフォンの辞書アプリケーションで「carelessly」を引いたところ、「うっかり」が出てきた。しかし、問いの文では「_____に」となっており、「*うっかりに」とは使えないと考えたため、他の語句を探すことにしたとしている。

参加者4は、ロシア語で「急いで/何でもやってしまう」という意味の表現から検索しよ

うとしたが、「バタバタ／ぱっぱと／乱打／妄りに」などの表現が見つかり、ウェブ検索などを試みたが、いずれも使い方はよくわからなかったとしている。

4.7 短文課題（7）の回答結果

表9 短文課題（7）の回答

(7) 【写真を見て、湖のようすを説明する】 湖は、美しかった。鏡のような水面に、_____。 <想定される回答>：景色 [3] / 木や家 [4] が 逆さ [2] に 映って [2] いた など						
参加者 1	参加者 2	参加者 3	参加者 4	参加者 5	参加者 6	参加者 7
風景が見えます？	映していた*	景色が写っていた	周囲の景色が映り込む	反射した*	景色が反映された*	景色が映し出されている
← landscape	← reflect	(辞書使用せず)	← 鏡のような水面に景色	← 反射	← 反映	← reflect

写真を見て説明する文である。湖の水面に、周囲の木々や小屋などの景色が逆さまに映し出されている¹⁹。

参加者4は、問いの文中の表現をそのまま用い、「鏡のような水面に [スペース] 景色」と、2つの語句の間にスペースを入れてウェブ検索し、これらの語句とどのような表現が共起するかを探している。「景色が映り込む」という表現があったので、それを使ったとのことである。

ほかの参加者は、辞書を使用せずにシンプルに「うつっていた」とするか、英語あるいは日本語の既知の語から検索を始めている。参加者6は、オンライン辞書で「反映」を見ているが、「反映する」か「反映される」かを例文で確認したかったとのことである。結果的にこの文法情報の確認は、成功にはつながらなかったようである。「反映する」は、「世相／時代／意見を反映する」のような場合は他動詞として用いられるが、「景色が湖に反映する」の場合は自動詞用法で表現可能となる。参加者7は、「reflect」から「映す／映し出す」を見つけたが、「月が湖に映し出されていた」という例文から「映し出す」を選んだとのことである。

参加者2と5は、「何が何を」映していたか、「何が」反射していたかということが書かれていないため、文法的に見ると不十分な表現となっている。

19 鈴木(2010)で、辞書を用いたと思われる直訳的で不自然な表現として「水の上できれいなはんえいがあった」(→「水の上できれいに映っていた」「reflection」の訳か)という例が挙げられており、その例を参考にした問いである。

4.8 短文課題(8)の回答結果

表10 短文課題(8)の回答

(8)【写真を見て、電車内のような状況を説明する】 隣の人との間を少し_____たら、あと二人すわれそうだ。 <想定される回答>: 詰める [2] など						
参加者 1	参加者 2	参加者 3	参加者 4	参加者 5	参加者 6	参加者 7
			狭めたら		(回答なし)	スペースがあつたら*
			← ロシア語で 「間を狭くする」		← ① scooch ②間を	(辞書使用せず)

問(8)では、電車の座席に座っている人の写真を示している。その人物の両側には、それぞれ約0.5人分と1.2人分ぐらいのスペースがある。その人が0.5人分のスペースの方向に少し移動して間隔を詰めれば、反対側にはほぼ2人分のスペースが確保できるということを示す矢印と2人分のスペースを示す○印によって示している。参加者4と6にはその問題意図は伝わったが、参加者7は、その人が「移動する」ことではなく、移動によって「十分なスペースが確保される」ことのほうに着目して表現しようとしたものと思われる。問題文中の「間を」を「間に」と読み違えた可能性もある。

「詰める」は旧日本語能力試験出題基準では2級レベルの語だが、それは、おそらく「入れ物の中に、すきまのないように物をいっぱいに入れる」という基本的意味の「詰める」であり、この提示文脈における「間/席を詰める」のように、「間/空間を短く/小さくする」の意味で「詰める」が使用された例には、中級～中上級レベルの学習者は触れたことがないかもしれない。実際に参加者6は、「詰める」を前者の基本的意味において理解していたため、検索中にヒントとなる例文を見たものの、それを採用しなかったと述べている。

参加者4は、この場合、ロシア語では「間を～」という表現よりも、やはり「人」が動く/移動するという表現をするため、どう表現すればよいか難しかったとしている。日本の電車の中で、乗客に対しこのような注意を呼びかけるメッセージが表示されていたのではないかと思い出し、ウェブで画像を調べてみるなどもしたが、該当する表現は見つからなかったということであった。結局、スマートフォンの辞書アプリケーションで「間を狭くする」というロシア語から「狭める」を見つけている。

5. 検索方法において観察された特徴

以上、第4節では、短文課題(1)～(8)についての7名の調査参加者の回答を順にまとめて示し、補足説明を行った。調査参加者が辞書から言葉を見つけていくプロセスにおいて観察された特徴あるポイントを、以下①～⑩にあらためてまとめる。

①当該の文脈で使えるかどうかを、辞書等で表示された例文の文脈と照らし合わせる

例1) 参加者2(中東・アラビア語母語話者): 問(2)「関係を深める」

「強める」は「ドルを強める」等の例文から文脈に合わない判断

例2) 参加者5(中南米・スペイン語母語話者):

問(4)「(会議の)内容については、進歩がなかった」

「文明の進歩」「英語が進歩しなかった」という例文から使用に疑問を感じる

例3) 参加者1(東欧・東欧語母語話者): 問(1)「嫌なことやつらいことも耐える」

「endure」→「運命の試練に耐える／辛い仕事に耐える」から判断

例4) 参加者7(中南米・スペイン語母語話者):

問(4)「内容については、進展がなかった」／問(6)「責任を転嫁した」／問(7)
「景色が映し出されている」

「交渉はほとんど進展しなかった」／「blame」→「ジョンは責任を他人に転嫁する」
／「reflect」→「月が湖に映し出されていた」から判断

例1)と2)は、例文の文脈と表現したい文脈とが合わないと感じた例、例3)4)は、問いの文脈に合う例文がうまく探せた結果、表現に成功している例である。鈴木・高野(2015)でも、的確な表現を選ぶ際に、用例を見て考える必要があるということが指摘されているが、やはり辞書の例文の意義は大きいと思われる。

② 既有的の語彙・文法知識を活用する

例1) 参加者3(北欧・北欧語母語話者): 問(2)「関係を強める」

「increase」→「増やす」は「量」に用い、「関係」については適切でない判断

例2) 参加者2(中東・アラビア語母語話者): 問(6)「むやみに」

「carelessly」

→「うっかり」は「*うっかりに」とは使えないため、適切でない判断

例3) 参加者5(中南米・スペイン語母語話者): 問(2)「関係を強化にいく」

文構造を誤解し「強化していく」の形が作れなかった

例4) 参加者6(中南米・スペイン語母語話者): 問(7)「景色が反映された」

用法による動詞の自他の使い分けがとらえ切れなかった

鈴木(2010)では、学習者の母語あるいは第二言語からの直訳的な表現も含め、構文単位での不自然な表現は、辞書により解決することが難しいと思われることが指摘されている²⁰。また、鈴木・高野(2015)でも、譲歩あるいはヴォイスに関わる表現など、文構造全体に関わるような文法項目は、辞書では確認しにくいという点が指摘されている。

文法に関わる事項であっても、例えば、動詞「住む」の補語が「東京に」なのか「東京で」なのか、あるいは「わかる」の補語は「英語を」なのか「英語が」なのかなど、適切な助詞を選択したい場合などは、辞書を検索することで、挙げられている例から確認できる可能性は高い。しかし、文法に関わる事項の中でも、ここで見られたような「～ていく」の使い方や、用法によって動詞の自他が異なるなど、表現したい文の全体を見て文構造を的確に考える必要のある場合については、注意が必要だと考えられることが観察された。

20 例えば、注22に述べたように、問(8)の作成の参考とした「水の上できれいなはんえい(反映)があった」(→「水の上できれいに映っていた」「reflection」の訳か)という表現や、「きれいな見通しをきょうじゅ(享受)した」(→「とても見晴らしがよかった」「enjoy」の訳か)という例が挙げられている。

③ 2種類の辞書（英和・和英など）で相互検索して確認する

例) 参加者1 (東欧・東欧語母語話者) : 問 (1) 「耐える」 / 問 (6) 「単調に」
 「endure」→「耐える」 / 「耐える」→「endure/bear/withstand」
 「monotonous」→「変化のない/単調な/退屈な」 / 「単調」→「単調に(monotonously)」
 電子辞書の英和辞典で調べた後、候補となる日本語の表現を和英辞典で調べ直す

鈴木・高野(2015)でも、複数辞書検索(対応する別の対訳辞書を使って相互検索を行うこと、あるいは種類の異なる辞書を使って二段階検索を行うこと)が、的確な表現を選び出す際のポイントの一つとなるのではないかと指摘されている。

このように、「英和辞典」と「和英辞典」の双方を使う相互検索の方法は、独立した個々の辞書を複数搭載している電子辞書ならではの方法であると言えるだろう。今回の調査で、4名の参加者が使用していた「imiwa?」というスマートフォンの辞書アプリケーション(英日・日英)では、英語から検索を行った場合も、日本語から検索を行った場合も、結果として表示される例文は同一の日英対訳パラレルコーパス(2言語の対訳コーパス)から抽出されたものとなっている。したがって、どちらの言語から検索しても結果的に同じ例文に行き着くことになり、二段階に例文を確認するということはできない。鈴木・高野(2015:143)でも、「種類の異なる辞書には、その特徴を生かした使い方がある」とされているが、このように英和・和英など相互に対応する対訳辞書を使って例文検索を補強する方法は、電子辞書、あるいは異なるデータベースから例文を表示させる複数の辞書間において有効な方法であろうと考えられる。

④ 2種類の辞書（対訳辞書と国語辞典）で二段階に検索して確認する

例) 参加者4 (中央アジア・ロシア語母語話者) :
 問 (4) 「(内容については) 進捗がなかった」
 「(ロシア語で) 進歩」→「進歩/発達/進捗」 / 「進捗」の意味を確認

まず、学習者の母語や第二言語から日本語の表現を探し、候補となる表現をさらに国語辞典で確認するという方法である。鈴木・高野(2015:143)でも、伊日辞典と国語辞典の2種類の辞書を使った検索方法が観察されたことが報告されている。候補となる表現の意味を確認する一つの方法であると考えられる。

⑤ 動詞述語を見つけるために補語の名詞から検索する

例) 参加者4 (中央アジア・ロシア語母語話者) : 問 (3) 「目的を実現する」
 参加者2 (中東・アラビア語母語話者) : 問 (5) 「責任をなすりつけた」
 動詞述語を見つけるために、補語の名詞「目的」「責任」から検索する

「目的を～」の述語部分に当てはまる的確な動詞を探したい場合、候補となる日本語動詞に見当をつけ、「達成(する)」を検索したり、英語の「accomplish」「achieve」等から対訳

を探すこともできる。一方、ヲ格補語の名詞「目的」に着目し、その名詞から検索を始めることも可能である。安定した結びつきのコロケーションであれば、その表現は用例として挙げられている可能性が高い。

⑥動詞述語を見つけるために、補語の名詞に格助詞を加えて検索する

例) 参加者6 (中南米・スペイン語母語話者) :

問 (3) 「目的をかなえた」 / 問 (5) 「責任をなすりつけた」 / 問 (8) 「間を (詰める)」
「目的を」 「責任を」 「間を」 の形でオンライン辞書を検索する

述語部分的に的確な動詞を探したい場合に、補語の名詞に格助詞を加えて検索する方法である。「目的」「責任」だけでなく「目的を」「責任を」とすることで、検索結果の表示件数を絞ることができる。この方法は、候補表示件数のかなり多いタイプのオンライン辞書に適したものと思われ、今回の調査では、そのような辞書の特色をよく知っていると思われる参加者がこの方法をとっていた。逆に、スマートフォンの辞書アプリケーション (例えば「imiwa?」) では、この方法で検索すると、表示される件数が減ってしまい、的確な動詞の候補を探すことができなくなるようである²¹。また、通常の電子辞書も、全文検索方式を採用していないため、このような検索方法は使えない²²。鈴木・高野 (2015:143) に「種類の異なる辞書には、その特徴を生かした使い方がある」とあるように、それぞれの辞書の特徴をつかんだ検索方法を工夫する必要があることがわかる。

⑦動詞述語を見つけるために、補語と動詞を組み合わせて調べる

例) 参加者4 (中央アジア・ロシア語母語話者) :

問 (2) 「関係を深める」 / 問 (5) 「責任を転嫁する」
「関係を深める」 「責任を移す」 の形でウェブ検索を行う

述語部分的に的確な動詞を探したい場合に、候補となる動詞に見当をつけ、補語と組み合わせて検索する方法である。コロケーションとして定着した表現であれば、オンライン辞書やウェブ検索では、該当する表現がそのまま表示される²³。しかし、予測が外れた場合にはそれ以上の情報は得られない。また、ウェブ検索では、コロケーションとして適当でない場合でも、「責任」「移す」などの個々の要素を一連の文脈内に含むサイトが表示される。その場合

21 「imiwa?」という辞書アプリケーションを使っていた参加者は、いずれもこの方法はとっていないため、仮にこの方法で検索したらどのようなようになるかを、使用者の一人(参加者7)に確認してもらった。

22 ただし、最新の電子辞書では、例えば「目的を」と入力することによって、搭載されている国語辞典の語義説明文中などから「目的を」という文字列を拾ってくる検索機能を備えたものがあるようである。電子辞書におけるこのような索引機能の詳細については、オンライン辞書「jisho」(<http://jisho.org>) 作成者の一人であるKim Ahlström氏からの情報による。

23 今回の調査で、スマートフォンの辞書アプリケーション (imiwa?) の使用者には、この方法を用いている者はいなかった。使用者の一人(参加者7)に確認してもらったところ、このアプリケーションでは「目的を達成する」あるいは「関係を深める」という単位での検索はできないようである。(「目」「的」「達」「成」、あるいは「関」「係」「深」のように、個々の漢字に分解されて結果が表示されるだけのようである。) また、オンライン辞書などでも、この方法をとると、ほかにもよりの確な候補があった場合に、それが表示される可能性は排除されてしまうため、可能性のある複数の表現を比べたい場合には適さない検索方法かもしれない。

には、それらの個々の要素が必ずしも1文中において適切な共起関係に立つとは限らないため、情報の取捨選択には注意を要する。

⑧国語辞典の語義説明からヒントとなる表現を探す

例) 参加者4(中央アジア・ロシア語母語話者): 問(3)「目的を実現できた」

「目的」の語義説明の中から「実現(する)」を選び出し、確認する

候補となる語句を探すために、国語辞典の語義説明を参考とする方法である。ただし、必ずしもいつも「補語-述語」等の安定した共起関係に立つ表現が見つかるわけでないため、注意が必要である。例えば、「目的」の語義説明「実現させようとしてめざす事柄」から「目的を実現する」、あるいは「責任」の語義説明「ある行為の結果として負わなければならない責めや償い」(『明鏡国語辞典』第二版)から「責任を負う」が導き出せれば、この方法は有効であろう。一方、例えば「連絡」の語義説明「情報などを知らせること」(同上)から、「?連絡を知らせる」という表現は作り出せず、「発展」の語義説明「物事の勢いや力がのびひろがること」「より進んだ段階に移ること」(同上)から、「発展を遂げる」のようなコロケーションが抽出できるわけではない。したがって、この方法を試みるかどうかの判断の際には、語義説明で用いられる文が、当該の語句を含んだ適切なコロケーション情報を提供するかどうかについて、文構造と意味の観点からある程度の予測を働かせる必要があるのではないと思われる。

⑨ウェブ検索で情報を探す

例) 参加者4(中央アジア・ロシア語母語話者): 問(7)「景色が映り込む」

「鏡のような水面に[スペース]景色」と複数の表現を入力しウェブ検索する

⑦に述べた方法(補語と動詞を組み合わせたウェブ検索)では、その組み合わせがコロケーションとして適当でなかった場合でも、個々の要素を一連の文脈内に含むサイトが表示されるという性質があると述べたが、それを逆に利用した方法と言える。「鏡のような水面」と「景色」という複数の表現が一連の文脈内に含まれるサイトが表示されれば、その文脈内からヒントとなる表現を探すことができるというものである。役立つ情報を探索的に求めるタイプの検索であり、求める答えを確実に得るための方法とは言えないかもしれない。

⑩一般的なウェブ情報からヒントを探す

例) 参加者4(中央アジア・ロシア語母語話者): 問(8)「間を狭める」

電車内の乗客への注意の掲示を思い出し、ウェブで画像を探す

オンライン環境であれば、辞書サイトに限らず、画像も含めた種々の検索が可能であり、その性質を利用する方法であると言える。

その他に、今回の調査では特に事例が観察されなかったが、「漢字知識を活用する」とい

う方法も考えられる。鈴木(2013:142)では、上級学習者へのインタビューから、漢語を構成する要素(字音形態素)として漢字をとらえ、語句を探していくという方法のヒントが述べられている。今回の調査では、参加者5(中南米・スペイン語母語話者)が、同様の観点からスマートフォンの辞書アプリケーションを選んだことを挙げている。即ち、ある漢字が含まれる漢語あるいは漢字熟語を調べたい時、その漢字が、語中のどの位置に含まれていても検索可能であることが、アプリケーション選択の要件であったということである。例えば「味」という漢字を含む語句として、「趣味」「意味」「味覚」「興味」「興味深い」「味わう」など、「味」をその一部分に含む語がすべて検索可能であるということである。このような辞書アプリケーションであれば、表現したい事柄について、その鍵となる概念を漢字で表し、その漢字を構成要素の一部として含む語を、和語も含め一斉に検索するという方法がとれる。

また、辞書については、やはり表示させる用例の質と量について考える必要があるだろう。オンライン辞書や辞書アプリケーションについては、どのような例文データベースから例文を表示させてくるのかによって、例文の質が左右される。また、大量の例文が逆に、学習者自身に的確な表現を取捨選択させる負担を課すことになる可能性もある。今回の調査では、例えば参加者5(中南米・スペイン語母語話者)は、「例文が多すぎるとわからない、いい例文が4~5例あるといい」ということをインタビューで述べている。

6. まとめと今後の課題

本稿では、日本の大学に留学している中級・中上級レベルの日本語学習者7名の協力を得て、日本語で短文を完成する課題を行ってもらい、適切な表現を見つけるために辞書などのツールを実際にどのように使うかを確認する調査を行った。その結果について詳細に報告するとともに、そこで観察された特徴あるポイントを抽出し、示した。

また、本稿では、学習者の辞書等のツールの使用方法の詳細を確認するための調査方法についても、比較検討することを目的の一つとしている。ここでは、調査への参加協力者には、短文レベルで空欄箇所にあてはまる適切な日本語表現を考える課題を行ってもらった。その際、どのように辞書等を使ったかについて、「検索プロセス・メモ」を同時に書いてもらい、事後インタビューで詳細を確認する方法をとった。長文の作文などを書いてもらい、録画データをとる方法と比較すると、今回の調査方法の長所と短所、および改善点としては、以下のような点があると考えられる。

(2) 短文課題を行う調査方法について(長文の作文課題を行う調査方法と比較して)

a. 長所

- ・時間的に適度である。(作文課題を行う場合、より長時間を要することになる。)
- ・複数の調査参加者に同じ課題を行ってもらうため、検索方法にどのような違いがあるか、比較検討が行いやすい。
- ・プロセス・メモをとっておくことによって、調査参加者が、インタビュー時に検索の手順を思い出しやすい。(長文の作文の場合は、同時にプロセス・メモを書くのは負担が大きい。)

b. 短所

- ・調査への参加協力者本人が日本語で本当に表現したい文脈ではないため、表現がわからない時に、何とか解決したいという動機には弱い。
- ・文脈の前後が固定されているため、実際に文章を書く時とは異なり、ほかの表現を使って全体を書き換えるなどの方法がとれない。

c. 改善点

- ・どちらの方法をとる場合でも、インタビューの質を高める余地がある。その参加者の検索行動の詳細を確認するだけでなく、ほかの参加者の辞書使用方法との比較も同時に行いながら、質問を行っていくとよい。
- ・調査参加者に課題を行ってもらう際に、調査実施者がそのプロセスを確認しつつ、プロセス・メモへの記入をサポートするという方法も考えられる²⁴。

本稿では、学習者の辞書使用の詳細を記録し、検討する調査を行ったが、一方では、鈴木・高野(2015)で報告されているように、学習者の「書く」活動に役立つよう、辞書等のツール使用のスキルアップに焦点を当てた学習活動を何らかの形で実践していくことも意義あることではないかと考えられる。そのような活動は、まさに学習者自身が主導する立場に立つものと考えられるが、日本語教師としてその内容を検討していくことも辞書等のツールの効果的な使用を推進・支援していくために必要なことではないかと考えている。今後、ここで抽出された特徴あるポイントを、使用するツール別になどさらに精査することを通じて、具体的にそのような学習活動に生かしていくことを考えたい。

引用文献

- 北原保雄(編)(2010)『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店
- 鈴木智美(2010)「辞書の使用が引き起こす学習者の不自然な表現－『JLPTUFS 作文コーパス』の作文から見えてくること－」『2010 世界日本語教育大会(ICJLE) 予稿集』(DVD版) 1436-0-1436-9
- 鈴木智美(2012)「留学生の辞書使用についての実態調査－東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析－」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第38号 pp.1-16
- 鈴木智美(2013)「日本語学習者のための辞書使用のスキル養成のポイント－留学生の辞書使用に関するアンケート調査自由記述欄のSCATによる質的分析を通して－」『東京外国語大学論集』第86号 pp.131-158
- 鈴木智美(2014)「中上級日本語学習者の作文過程における辞書使用—辞書使用の詳細を可視化するデータベース作成に向けて—」『東京外国語大学留学生日本語教育セン

24 今回の調査では、課題を行ってもらう際には調査実施者は少し離れた場所で待機し、終了後にプロセス・メモを見ながらインタビューを行った。調査参加者がどのように実際に辞書を検索するかについては、記録・確認を行うのは容易ではないが、現在のところ、作文時の録画よりも、プロセス・メモのほうが再現性が高いのではないかと感じている。また、スマートフォンやタブレットでも、PCと同様、使用中の画面をそのまま動画として保存するというアプリケーションもあるようだが、調査参加者個人の機器をそれぞれ使用して調査を行わせてもらっている場合には、プライバシーや安全性などの面から、そのような記録方法でデータ収集を行うことは難しいと思われる。

ター論集』第40号 pp.15-33

鈴木智美・高野愛子 (2015) 「中上級日本語学習者の辞書使用－作文時の辞書使用の詳細調査と文章表現のための辞書使用スキルアップを目指すワークショップ実践報告」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第41号 pp.137-156

姫野昌子 (監修) (2004) 『日本語表現活用辞典』研究社

姫野昌子 (監修) (2012) 『日本語コロケーション辞典』研究社

Hodošček, Bor・阿辺川武・Bekeš, Andrej・仁科喜久子 (2011) 「レポート作成のための共起表現産出支援－作文支援ツール『なつめ』の使用効果－」専門日本語教育学会『専門日本語教育研究』vol.13 pp.33-40

コーパス・オンラインツール

「英辞郎 on the WEB」アルク <<http://eow.alc.co.jp/>>

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) 国立国語研究所
<http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/>

「jisho」<<http://jisho.org>>

「なつめ」(Natsume) 日本語作文支援システム <<https://hinoki-project.org/natsume/>>

「NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)」<<http://nlb.ninjal.ac.jp>>

「NINJAL-LWP for TWC (NLT)」<<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info>>

「筑波ウェブコーパス」筑波大学留学生センター

<<http://www.intersc.tsukuba.ac.jp/~kyoten/twc.html#.VgVMvumwvP1>>

How Japanese Language Learners Find Words from a Dictionary: Studies of Dictionary Use by Seven Mid to Pre-advanced Learners

Tomomi SUZUKI (Tokyo University of Foreign Studies)

【keywords】 “Writing”, Dictionary Application, Smart Phone, Online Dictionary, Electronic Dictionary, Searching Process and Notes*

In this paper, with the help of seven mid to pre-advanced level learners, I investigated how a Japanese language learner can appropriately find the most suitable word or expression by using dictionary tools.

The characteristic points are as follows:

- (1) Check example sentences to see if the usage can apply to the required context.
- (2) Refer to a learner's acquired vocabulary or grammar. However, a dictionary does not always supply the grammatical information required.
- (3) Check more than one bilingual dictionary (i.e. English-Japanese, Japanese-English) to verify the usage. This method is useful when checking the dictionaries which provide multiple example sentences from different source of corpus or database.
- (4) Check more than one dictionary (Bilingual Dictionary, Monolingual Dictionary) to verify the usage.
- (5) To find the appropriate predicative verb, check the complement noun.
- (6) To find the appropriate predicative verb, check the complement noun with the particle. This method is useful when utilizing a dictionary with full-text search function.
- (7) To find the predicative verb, check the verb combined with the complement.
- (8) Check a Japanese-Japanese dictionary to find hints from expressions in the explanation.
- (9) Check a web site including similar Japanese context.
- (10) Check a web site to obtain any hints, including graphics.

*Searching Process and Notes; Participants took notes on which words they looked up and which example sentences they examined.